

親子の絆 × 地域の絆

その2
～地域の絆～
取材・10月29日

緩やかな信頼関係を
多くの人と持つことが
さまざまな社会問題を防ぐ。



市と信州大学人文学部は地域文化の振興・生涯学習・学術研究などを協力し合う連携協定を結んでいます。写真は7月12日に豊科ふれあいホールで行われた委託調査研究報告会。

Q5 具体的な信頼関係の築き方は？

これさえすればという決定打があるわけではなく、小さなことの積み重ねでできてくるものだと思います。実際、今回の調査では、普段からの近所づきあいが、地域の人々への信頼感の形成に影響を与えていることが分かりました。あまり疑心暗鬼になり過ぎないこと。そして、直接顔と顔をあわせた関係があつてこそ深まるといえます。

Q6 「信頼」はカギ？

信頼は人々の自発的な協力を生み出す土台になり、また、自発的な協力が信頼を確かなものにします。それは地域を作り上げていくうえで欠かせないものと言えるでしょう。ただし、信頼感は強固なものでないと効果がないというのではなく、見知らぬ人への相づちのような薄い信頼関係であっても無意味ではないというのが、先ほどのソーシャル・キャピタル研究で言われていることです。ひとつひとつは弱くて力がなさそうに見えるものの重なり合いこそが大事だということ。また、そうしたかかわりをさまざまな場面で作っておくことが、自分の外部への接点を増やし、チャンスを広げることににつながるのです。

Q3 今後、インターネットの普及で近隣住民との関係は薄れていく？

インターネットの普及で、すぐさま近所とのつきあいが切れてしまうということはないでしょう。直接的なコミュニケーションと間接的なコミュニケーションは、どちらかが強まればどちらかが弱まるというものではなく、お互いを補完しあえるものと考えた方がいいです。

そもそも近隣との関係は、何らかの必然性があるから生まれてくるものです。かつて地域が担ってきた多くの業務は、その必然性が認められなくなり、行政や企業に外部化されてきました。しかし、地域にしかできないこともあります。また、地域にかかわる意味は年代によっても異なります。特に子育て世代や高齢者の場合、近くで接して住んでいることに、ある程度の必然性があるのではないかと思います。

Q4 調査ではソーシャル・キャピタルという考え方が登場します。

ソーシャル・キャピタルとは「人々の協調行動を活発化することによって社会の効率性を高めることのできる、信頼・規範・ネットワークといった社会組織の特徴」。日本語では、社会関係資本と呼ばれます。簡単にいうと、人との社会的つながり。ソーシャル・キャピタルは、治安の悪化を防いだり、子どもの学習機会を広げたり、さらには健康の増進にも効果があるとも言われています。

関心が高まったのはここ10年くらいのことです。アメリカで若者が銃を乱射する事件がありましたよね。人とのつながりから遮断されることが、本人にとってはもちろん、社会全体から見ても大きな損失になることにあらためて注目が集まりました。そこには、競争を重視して、人と人とのかわりを見過ごしてきた風潮への反省も含まれています。ただし、かつての共同体を復活させるといったものでなく、もう少し緩やかな関係に価値を置こうとするところに、この考え方の特色があります。

人間として成長する過程で身に付けなければならない「信頼感」。

「親子という『厚い信頼』はもちろんのこと、地域の人びとへの『薄い信頼』も有効に働く」。昨年、安曇野市民の地域意識と活動に関する社会調査を行った信州大学人文学部の祐成准教授は、そう解説します。

祐成准教授に、地域の絆についてお話を伺いました。

Q1 安曇野市の地域活動の現状は？

昨年実施したアンケート調査結果からみると、近所での立ち話や助け合いといった近所づきあいは、年齢が高いほどが盛んで、居住開始年齢が低ければ低いほど盛ん。同居人数も家族が多いほうが盛んになる。また、近所づきあいが盛んなら、区の活動など地域活動も盛んだと言えます。

Q2 地域と子育てについてどう考えますか？

親子の関係だけが深まってしまうと、かえって問題が生じてしまうと思います。近隣に視野を広げ、信頼関係を築くことも子育て期には必要ではないでしょうか。

学校に理不尽なクレームを繰り返す保護者が話題になりますが、それは極端な例としても、「自分の子ども VS サービスを提供する学校」という図式だけが一人歩きしてしまうと、他の人とともに問題解決を図るという発想が生まれにくくなるでしょう。

重要なのは、世代間のノウハウの蓄積や、いま同じ境遇にある人同士のかかわりだと思います。子育ての方針は家庭によって違って当然ですが、お互いの壁が高くなりすぎると、自分の家のことしか見えなくなってしまうのではないのでしょうか。



信州大学
人文学部文化社会学専攻
祐成 保志 准教授

昨年、村山研一教授、渡邊勉教授（当時は准教授、現在は関西学院大学教授）とともに、市民の地域意識と活動に関する調査を実施。1歳の男の子の父親でもある。